

2020年度

入学試験問題
(A日程午後)

国語

注意

- 1 「開始」の合図があるまで開いてはいけません。
- 2 「開始」の合図で、1/5から5/5まで問題が印刷されていることを確かめなさい。
- 3 解答用紙に受験番号を書きなさい。名前を書いてはいけません。
- 4 答えはすべて解答用紙の指定された解答らん^{らん}に書きなさい。問題用紙に書いても得点になりません。
- 5 解答用紙はこの表紙の裏にあります。
- 6 「終了」^{しゅうりょう}の合図で、すぐに筆記用具を置きなさい。
- 7 問題および解答用紙は机の上に置き、持ち帰ってはいけません。

雲雀丘学園中学校

一 次の文章Ⅰ・Ⅱを読んで、あとの問いに答えなさい。

Ⅰ 子どものころは大人になったら巨大な水槽の中に水と魚、そして昆虫の幼虫もいるような、今でいうビオトープみたいなものをつくり、その生態を観察したいと思っていました。そういうことを空想したら眠れなかった。

また、当時は団地に住んでいたんですが、普段、昆虫採集をしている自然の場所と建物の中があまりにも違うことに、違和感を抱いていました。人間が住むところと自然は、もっと近いものにできるのではないかと。今思うと、子どものころに抱いていたそういう意識は、建築とどこかで結びついていたのかもしれない。

何かを発見することの喜びを追究するのであれば、建築という分野でもそれができるかもしれない。ギリシャの神殿やピラミッドなど、古くて巨大な構築物の持つ美しさには惹かれてたし、石をツンただけで巨大なものが成立することの不思議さに対して、純粹にすごいと感じていたから、建築も面白そうだという直感もあつたのでしょう。入試の直前になって、農学部や理学部ではなく、建築学科を受けようと思ったんです。

建築学科をめざす人は、建築に対する憧れがある人がタイハンだと思んですが、僕はむしろ違和感のほうが強かった。たとえば博物館に行くとき、展示物はすごく面白いのに、建築には表現しがたい嫌な気持ちを抱きました。コンクリート打ち放しの空間の中でヴォリュームをソウサするようなシステムは、人間という生物と断絶している。そういう違和感があるからこそ、そうではないものを発見してみたいという、強い気持ちが生まれたのかもしれない。

〈中略〉

生き物の世界を見てみると、それらは突然生まれるのではなく、もともとあるものからなるように生まれています。路の隙間にたまったホコリみたいなところから小さい草が芽生え、そして枯れ、それらが重なり合うところに、新しい草が芽生える。そのうち木の根が伸びてきて、長い時間をかけながら草や木で土が埋まっていく。複雑な分子のかすかなからまり合いが生命の仕組みを生み、そのようにして生まれた生物同士も複雑にからまり合いながらより大きな秩序をつくっていく。あるいは、それらを包む環境とからまってより豊かな場をつくっていく。

③ 近代建築というのは、すでにそこにあるものをいったんごハサンにして、ブルドーザーで白紙状態をつくってから建てるという思考ですが、これからの建物のあり方というのは、もう少し違う、生き物の生成に近いようなものではないかと思うんですね。

建築は人工物だから、生き物のような建築といっても、しよせんイメージの話でしかない、メタファー（隠喩）でしかないところえられるかもしれません。でも、1000年間を1時間に早回して都市を眺めることができたなら、あぶくのように建物が現れては消え、ものすごいイキオイで新陳代謝しているように見えると思うんです。人工物は動かないというところえ方は、人間の寿命という時間の速度感で見ているからにすぎない思考。1万年、10万年、100万年といったスパンで考えると、人間が生きている、生きていないという境界さえあいまいになっていくのではないのでしょうか。

僕たちが建物をつくる行為というのは、あぶくが生じたり消えたりしているような出来事の1つでしかない。建築も「生きている」世界の一部であると思うんですね。

Ⅱ 建築という人工物も自然の一部だから、もっと自然に近づくことができる。そういう建築はどういうものなのか、考えた末にたどり着いたのが、「からまりしろ」という概念です。少し謎めいた言葉に聞こえるかもしれませんが。

④ 純粹な空間をつくるのが近代建築の概念とするならば、逆のほうにシフトして、いろんな出来事や人の行為がからまり合うきっかけをたくさん持つことを大切にしたらどうかと考えたんです。生き物の世界にあるような、すでにいろいろなものからまっている状態に、さらにからまるようなものをつくっていく。そういう考え方で建築をつくることができれば、それは新しいのではないかと思っています。

たとえば、海の中にいる子持ちコンブ。凹凸のあるコンブのひだの上に、魚が卵を産みつけ、卵がフチャクしたコンブは、海底の凸凹した岩にからまっている。何かに何かが重なり合い、さらにそこに多様なものがからまり合い豊かな世界ができ上がる。そういう成り立ちを1つの理想形として建築をつくれなにか。「からまりしろ」というのはそういう概念なんです。「しろ」というのは何かものがからまる余地のことで、のりしろの「しろ」。これからの建築というのは、「からまりしろ」をつくることなのではないのでしょうか。

「エコロジー」という言葉は、少し誤解されているところがあると思います。本来、エコロジーというのは「生態学」、つまり生物同士の持っている関係をとらえた言葉です。いろんな生物が関係を築きながら生きる環境のことを意味していると思うんですが、現在、エコ建物と言われているものは、建物の中でいかに効率よく暖房をするかというような観点ばかり重視されていて、建築が閉じる方向になっている。本来の概念と反対のことが起こっているような気がするんです。人間の生きる環境とほかの生き物が生きる環境を切り離さず、一体としてとらえていかなないと、本当のエコロジーは成立しないのではないのでしょうか。

山の中に数軒の家が建っている風景は、すごく美しいと思うんです。でも、山のように巨大なビルがポンと建ったら、それを美しいと思うでしょうか。おそらく、思わないでしょう。B、ある種のおぞましさを感ずると思うんですね。それはたぶん、ほかの生物と関係を持たずに、人間という種だけが暮らす特殊な場所が、大きなスケールで独立して建ち上がることに対するおぞましさだと思います。人工物であつたとしても、ほかの生き物が生きられるような環境が一緒であれば、おそらく違う印象を受けるでしょう。

海に潜って珊瑚礁を見ると、そこはとても自由な世界で、刺激を受けますね。珊瑚礁のまわりで成立している秩序と同じくらいの自由さで建築をつくるのが、理想だと思います。時間をかけて何かがの上に何かがからまり合い、それが連続して生まれる風景は本当に美しい。人間のつくってきた都市もそういうところがあると思うんです。

人間は、人間だけで生きているわけではなく、ほかの生き物を食べなくては生きていけません。ほかの生物との関係性の中で生きている。そういうことに対してもっと意識を向けた、環境や人工物のつくり方というのがあるはずなんです。今後もそれを考えていきたいですね。

（平田晃久『建築は、もっと自然に近づくことができる』）

*ビオトープ：動植物が自然のままに生息する空間。

*メタファー（隠喩）：たとえの一種。

*概念：思考の形式のこと。ここでは、筆者の考えの意味。

*分子：物質の最小単位となるもの。

*スパン：時間の幅。

*シフト：移動。転換。

問一 〓線部1〜6のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 〓線部①「建築学科を受けようと決めたんです」とありますが、それはなぜですか。それを説明した次の文の（a）〜（c）に入る適当なことを、それぞれ本文から三字以内で探してあげてはめ、文を完成させなさい。

子どものころ、ピオトープの中で生きものたちの（a）を見ていたと思っていたが、自然と人間の関係性への（b）を抱き、建築の世界でそれを解消する何かを（c）したいと考えたから。

問三 〓線部②「表現しがたい嫌な気持ち」とありますが、なぜそのような気持ちを抱いたのですか。最も適当なものを次のア〜エから選び、記号で答えなさい。

- ア 環境を壊しながら建物をつくっているのに、自然が展示されているから。
- イ 展示物は工夫して置かれているのに、建物はコンクリートだけでつくられているから。
- ウ 建造物は巨大であるのに、その中で小さな生き物ばかりが展示されているから。
- エ 展示物は興味深いのに、生き物と切り離された建物には魅力を感じられないから。

問四

A	・	B
---	---	---

 にあてはまる適当なことを次のア〜オからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

（同じ記号は二度使えません。）

- ア また
- イ むしろ
- ウ たしかに
- エ つまり
- オ たとえば

問五 〓線部③「近代建築」とありますが、建築についての筆者の考えを述べた次の文について、あとの問いに答えなさい。

近代建築は（a）建築のことであるが、これからの建築は（b）建築のことであると考えている。

(1) (a) にあてはまるものを次のア〜エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 限られた中でもたくさん生き物を展示できる
- イ 石をつんでできあがった巨大な
- ウ 存在しているものをすつかり壊してからつくる
- エ 何もない空間から生み出される

(2) (b) にあてはまることをⅠから十五字以内で探し、書きぬきなさい。（「」は字数に数えます。）

問六 〓線部④「『からまりしろ』をつくる」とありますが、それは建築においてどのようなものをつくることですか。本文のことばを使って四十五字以内で説明しなさい。（「」は字数に数えます。）

問七 〓線部⑤「本当のエコロジー」とありますが、筆者はそれをどのようなことだと考えていますか。本文から二十五字以内で探し、書きぬきなさい。（「」は字数に数えます。）

問八 次のア〜オについて、本文に書かれている内容として正しいものを二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 建築は、珊瑚礁とその周囲の環境にある自由さを手本にしてつくるのがよい。
- イ 建築は、人間のために特別な場所をつくることでいつそう美しいものとなる。
- ウ 建築は、人間とほかの生き物を断絶することで新たな何かを生み出せる。
- エ 建築は、快適な空間にするために効率を第一に考えてつくるのが理想的だ。
- オ 建築は、人間の感覚をはなれて長い時間で考えるとき生き物のように見える。

問九 筆者は「からまりしろ」について、別の著作の中で次のⅢのように述べています。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

Ⅲ 飛行機の窓からアルプスを見下ろしていたときだった。たくさん雲が山ひだに沿うようからみつき、強い光が差し込んで、美しい陰影の世界が広がっていた。その光景は、それだけで感動的なものだったが、それが現代建築にある示唆を与えてくれるような気がしはじめたのだ。水蒸気を含んだ山肌がぶつかって生まれる光景。小学校の教科書にも載っているような原理でできた光景だが、そういうからまり合う光景が生まれていること自体、じつは不思議なことである。それはそこに山肌があるからか。しかしその山肌はなぜそこにあるのか。それは地表面の活動があるからか。しかしその活動はなぜ生まれるのか……。問い始めれば宇宙の起源にまでさかのぼるような話だが、少なくともアルプスの様態は、そこからみつく雲に対してある親和性を持っていることは確かだし、そこには両者がからまり合うことよってしか生まれないようなまとまりが生まれていることも確かなのだ。

それは建築が生きているものの世界に接続できる地平を表わしているように見えた。考えてみれば生きているものの世界は、たんぱく質のようなマイクロの世界から、森のようなマクロな世界まで、からまり合い連鎖する秩序の織物なのだ。山肌が雲を引きよせるように「からまりしろ」となるものが、そこからみつくものを引きよせ、より高次のまとまりが形成されてゆく。それによって生物がいなくてもよかったかもしれない世界に、なぜかえもいえぬ複雑さを持った生命の光景が生まれ、そして更新されてゆく。

（平田晃久『建築とは（からまりしろ）をつくることである』）

*示唆…それとなく気づかせること。

*親和性…親しみ結びつきやすい性質。

*マイクロ…とても小さいもの。

*マクロ…とても大きいもの。

*高次…程度の高いこと。

*えもいえぬ…言葉では言い表すことができない。

(1) Ⅲ において、「からまりしろ」になっているものは何ですか。Ⅲから具体的に三字以内で書きぬきなさい。

(2) Ⅱ 〓線部「時間をかけて何かの上になんかからまり合い、それが連続して生まれる風景」とありますが、これをⅢではどのようなものになんかからまりしろと探し、書きぬきなさい。（「」は字数に数えます。）

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ゆきは大学卒業後、小学校の臨時教員になった。翌年、教員の本採用試験に向かう途中に震災で津波を受けていた田んぼを見て、ゆきは受験せずに帰宅した。

「わたし、農家継ぐから。教師にはならない」

皆は黙ったままだった。①一世一代の決意表明をしたのに、家族は何も言ってくれない。茶の間の時間が止まってしまったかのように感じるが、違う。なぜなら祖母だけは動いていた。まるでゆきの告白なんて聞かなかったように台所と茶の間を何度も往復し、次から次へと御馳走を並べている。②正志は口を開いたまま、ゆきを見ていた。何かを言いたくて一息吸いこんだが、息が吐き出せないまま固まってしまったようだった。そんな正志の代わりに祖母が声を出した。

「ささ、ご飯だ。みんな座って、な」

たぶん正志が言いたいのはそんなことではないだろう。そう思いつつゆきは、祖母に促されるがまま食卓に着いた。正志と祖父はまだ立ったままだった。そして、予想していた言葉が降ってきた。

③「……だめだ」

「え？」

ゆきは声のする方を見上げた。

「俺は認めらんねえがらな」

「……どうして」

「大事な仕事をしている真っ最中に、そげなこと言うなんて。おめらしくもない」

「ちがうよ！」

一言叫んだきり、色々準備してきた反論の言葉もまったく出てこなかった。信じられない状況に、体が震える。なぜなら反対しているのは正志ではなく、あの祖父だったから。静かに、とても静かに祖父は席に着いた。正志はまだ黙ったままだった。

「じいちゃん……」

祖父はそれ以上、言わなかった。沈黙が嫌いな祖母が、見たくもないテレビをつけた。食卓には、山の恵みをふんだんに取り入れた祖母の手料理が並んでいる。裏の山で採れた熊茸のおこわ、アケビの味噌詰め、沢もたしと呼ばれるキノコの煮物、イナゴの佃煮、朝掘ったばかりのサトイモで作った芋煮には、ゆきのための牛肉も入っている。皆、黙ってそれを食べた。誰も見ていないテレビで、方言アイドルが騒いでいる。

④「大丈夫だ、好きな人でもできたら気も変わるべ」

唐突に祖母が言った。唐突過ぎて、最初その言葉は方言アイドルに向けられたものだと思いきやそうになる。

「いずれ、わたしもじいちゃんもいなくなる。いい娘が一人で、こげなところにいらねえべ」

④「……父さんがいる」

ためらいながら、ゆきは言った。

「正志か。正志はわたしがいなくなったら、田んぼから離れて生活するべな」

それまで黙っていた正志が箸を置いた。

「ゆき。おまえ、試験うまくいかなかったんだな？」

「ちがうよ。……受けなかったんだ」

「なんだって!？」

驚いた正志が（ a ）を剥いた。怒りなのか手が震えてくる。

「どういうことだ」

④「今朝、電車で試験会場に向かったんだ。久しぶりだった、宮城の中心に向かうの。窓の外見てたら、やっぱりまだひどくてさ。春に……三月のあの日に、おにぎり持って避難所に行ったときのこと、思い出して」

三人は、黙って聞いている。

「でも田んぼにね、あの津波かぶってダメになった田んぼにね、稲が実ってたんだよ！ 塩害で最低三年はまともに育たないだろうって言われてた、あの田んぼだよ」

祖父が驚いた顔をした。

「それ見てたらわたし……わたし何やってるんだろ、って。あの日わたし、やりたいこと、やっと見つかったのに。また適当に目の前にとに流されて、自分に嘘付いてるって」

「何のためにおまえを、大学まで行かせたと思ってるんだ？ 農業させるためじゃない。分かるだろ!？」

正志の声を聞きながら、ゆきは祖父の顔を見ていた。

⑤「おまえが言っていることは現実逃避だ」

「そんなつもり、ない」

「じゃあおまえの人生設計をきちんと説明してみる。どんな作物をどのぐらい作って、いくら収入を見込んでいる？ 結婚は？ 婿取るつもりか？ なにより一生この土地に居続ける覚悟はあるのか？」

ゆきは一つも答えられなかった。

「もういいべ、正志。ほら、ご飯食べるべ」

「いいや、良くない。なあ、ゆき。この地域の田んぼがどれぐらい効率悪いか、おまえ知ってるのか？ 国からの補助金だって、ここいらの農家は九割九分対象外なんだ！ もちろん、うちもだ。見放されている土地なんだよ！」

ゆきは悔しきでいっぱいになる。どうしてこんなに責められなくちゃいけないのか。ただ、祖父が大事にしてきた田んぼを守りたいと思っただけなのに。

「棚田は一枚一枚狭くて機械も入らない。夏でも日照時間が少ない。沢の水は冷たくて稲は半分も実が入らない。まともに育たないんだ。そうだろ、じいちゃん」

祖父は黙っている。

「おまえの大学の金だつて俺が役場勤めだからなんとかあったんだ。年金あてにして田んぼやつてるようじゃ、農家に未来なんてない」

「じゃあうちの田んぼはどうなるの？」

目に涙をいっぱい溜めて、ゆきは聞いた。

「父さん、つぶすの？」

ゆきの目が、正志を責めるように見た。祖母がゆきの腕を優しくさすり、その視線を遮った。

「正志には正志の人生がある。それを責めるのは違うべ」

祖父がようやく口を開いた。じいちゃんまで父さんの味方なのかと思うと、ゆきは悔しかった。

「じいちゃんはいいの？ 田んぼつぶしてもいいの？ どうして父さんに継いでくれて言わないの？」

「人のことは言うな」

祖父が、ゆきを正面から見た。悲しくて、厳しい目だった。

「ゆき、おめは人のせいにしてる」

「じいちゃん……どうしてそんなこと言うの？ どうして賛成してくれないの」

「人のせいにして始めたことは、いつか、うまくいかなくなったら、また人のせいにするんだ」

湧き出てくるのは悔し涙だけだった。ほかにたくさん伝えたいことはあるのに。だから、ゆきは泣かなかった。ぐっと奥歯に力を込めた。

〈中略〉

ゆきが進む道、すべてが流れに乗っている気がした。いや、乗せられている気がした。それを運命と言うならば、それもいい。一時はそうも思った。なぜならやってみてすぐに、教師という職業の素晴らしさを体感できたから。夢中になれたから。けれどゆきは、運命ならなおさら自分で選び取りたい気持ち捨てることができなかった。たつたひとつでいい、自らの責任で決めたことを守って生きてみたいと思った。今思えば、もうずっと前から心がざわざわしていたのだ。春にあんなことが起きて、そのざわざわの意味にも気が付いたはずだった。あのとき、ちゃんと自分の気持ちに向き合っていればよかった。逃げずに家族と話し合えばよかった。農業のことをもっと勉強していればよかった。もしたら少しは家族を悲しませずに生きられたかもしれない。中途半端な気持ちで臨時教師を始めた自分が悪い。とことん、悪い。誰に対しても失礼なことだったのだ。

⑧……おめは人のせいになっている。

祖父に言われた言葉が痛かった。

(あべ美佳『雪まんま』)

問一 ——線部①「二世一代」について、ことばの意味として正しいものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 一つのこと集中すること。
- イ 人生にただ一度であること。
- ウ 自分一人だけで決めること。
- エ 一つの目標を心に定めること。

問二 ——線部②「正志は口を開いたまま、……固まってしまったようだった」とありますが、それは正志のどのような様子を表していますか。最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア ゆきが思いがけない発言をしたために、驚きのあまりとまどっている様子。
- イ ゆきが思いがけない発言をしたために、喜びのあまり何も手につかない様子。
- ウ ゆきが思いがけない発言をしたために、怒りのあまり我を忘れている様子。
- エ ゆきが思いがけない発言をしたために、悲しみのあまりあ然としている様子。

問三 ——線部③「え？」とありますが、ゆきはなぜこのように言ったのですか。三十文字以内で答えなさい。

()、()。「」は字数に数えます。

問四 ——線部④「ためらいながら」とありますが、ゆきはなぜためらったと考えられますか。最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 祖母にすぐ返事ができず、苦しまぎれのことばしか思い浮かばなかったから。
- イ 祖父ではなく、父のことを言ってしまったことに後ろめたさを感じているから。
- ウ 教師になることをあきらめることになり、父にしかられると思ったから。
- エ 父が味方をしてくれるかどうかわからないのに、その父を頼ることになるから。

問五 (a) にあてはまることばを漢字一字で答えなさい。

問六 ——線部⑤「現実逃避だ」とありますが、正志はゆきのどのようなことを現実逃避だと思っているのですか。それをまとめた次の文の

- (1) (・) (2) にあてはまることばを本文から探し、それぞれ二字で書きぬきなさい。

正志は、ゆきが試験を受けて本気で (1) になろうとする現実から逃げ出す言いわけとして、よく知りもしない (2) を継ぐと言っているのだろうと思っている。

問七 本文から祖母はどのような人物だと読み取ることが出来ますか。最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア ゆきの結婚を真剣に考えている人。
- イ ゆきの話を聞かずに急に話をしてくる人。
- ウ ゆきよりも正志を大事に思っている人。
- エ ゆきに対して思いやりに満ちた人。

問八 ——線部⑥「悲しくて、厳しい目だった」とありますが、祖父はどのようなことをゆきに伝えようとしたのですか。四十字以内で説明しなさい。(、。」「は字数に数えます。)

問九 ——線部⑦「ざわざわの意味にも気が付いたはずだった」とありますが、ゆきはどのようなことに気が付いていたのですか。解答らんに続くように二十五字以内で答えなさい。(、。」「は字数に数えます。)

問十 ——線部⑧「祖父に言われた言葉が痛かった」とありますが、それはなぜですか。最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 仕事には夢中で取り組もうと思っていたのに、仕事ができないことに対して他人を理由にしていることを何度も指摘されたから。
- イ 大事なことは家族に相談しようと思っていたのに、最終的には自分勝手に決断していることを具体的に指摘されたから。
- ウ 自分の気持ちに向き合おうと思っていたのに、自分の生き方を周りの状況で決めようとしていることをはっきりと指摘されたから。
- エ 運命の流れに乗って何でも体験しようと思っていたのに、他人の意見に左右されて動いていることを鋭く指摘されたから。

問十一 ～～線部「三月のあの日に、おにぎり持って避難所に行ったときのこと、思い出して」とありますが、それは次の文章[A]のことを指しています。これを読んであとの問いに答えなさい。

[A] 小さな公民館に、一八人の人が寝泊まりしていた。これでは一人半畳も使えないだろう。小さな石油ストーブと古い毛布があるだけの場所だった。ゆきたちが持つてきたおにぎりを見て、お年寄りには涙を流した。ここ三日間、菓子パンとお菓子を少し齧っただけだという。手を合わせ、拝むように感謝され、一口一口大切にご飯を咀嚼する人たちを見ると、胸が締め付けられる。わたしが泣いている場合じゃないんだ、そう思って奥歯をぐっと噛み、ゆきは堪えた。

「美味しいね、こんなに美味しいおにぎり食べたことないね！」

小さな女の子が言った。そうだねえ、うん、本当だねえ、と周囲の大人たちが言った。皆の頬が柔らかくほどけていく。こんなにも辛い状況の中、おにぎりを食べながら皆が微笑んでいる。

……食べ物って、お米って、こういう力があるんだ。心の中がざわざわした。うまく言えないけど、心の底から感動した。口に入れるものの大切さを痛感した。そして、この人たちの笑顔を祖母に見せてあげたいと思った。被災した人たちに、いったいどんな言葉を掛ければいいのか、ゆきはずっと考えていた。どんな言葉よりも、温かいおにぎりを一つ食べてもらうことのほうが伝わることもある。ずっとずっと励ましになる。お腹に力がこもる。お米にはそういう力があることを、ゆきは考えていた。

*咀嚼……かみくだいて味わうこと。

問 ゆきはどのようなことを思い出したのですか。それを説明した次の文の()に入ることを、文章[A]のことばを使って二十五字以内で考えてあてはめ、文を完成させなさい。(、。」「は字数に数えます。)

ゆきが避難所に行った時、お米は() ()力をもつものであるということを知り、感動したことを。

三 次の1～5の()に、あとの□のひらがなを漢字に直してあてはめ、反対の意味の熟語を完成させなさい。()の中のひらがなは二度使えません。

- 1 増加ー()少
- 2 前進ー後()
- 3 難解ー容()
- 4 新式ー()式
- 5 禁止ー()可

い・きよ・きゆう・けい・げん・た・たい

問一		1	ツ
	んだ	2	タイハン
		3	ソウサ
	ご	4	ハサン
		5	イキオ
	い	6	フチャク

問二 a

問二 b

問二 c

問三

問四 A

B

問五 (1)

(2)

問六

問七

問八

問九 (1)

問九 (2)

問一

問二

問三

問四

問五

問六 1

2

問七

問八

問九

ゆきは震災の時

問十

ということが気がついていた。

問十一

1

2

3

4

5

受験番号
得点

問一	1	積んだ	2	大半	3	操作	4	ご破算	5	勢い	6	付着
	ツ		タイハン	ソウサ	ハサン	イキオ	フチャク					

問二 a	生態
b	違和感
c	発見

問三	エ
問四 A	オ
B	イ

問五 (1)	ウ
(2)	生き物の生成に近いよう

問六	何にか何か	なものがか	と。
	に何か	の何が	
	かか	が	
	が重なり合	ら	
	り合	り	
	う	う	
	い、さ	豊	
	らに	か	
	そ	な	
	こ	世	
	に多	界	
	様	を	
		つ	
		く	
		る	
		こ	

問七	いのころ	いな	の
	んな	な	
	生	生	
	物が	物	
	関係	が	
	を	を	
	築	築	
	きな	き	
	が	な	
	ら	が	
	生	ら	
	き	生	
	る	き	
	環	る	
	境	環	

問八	ア
オ	
問九 (1)	山山肌ひだ

問九 (2)	から
	ら
	ま
	り
	合
	い
	連
	鎖
	す
	る
	秩
	序
	の
	織
	物

問一	イ
問二	ア
問三	予想
	して
	て
	い
	た
	答
	え
	を
	返
	し
	て
	き
	た
	の

問四	エ
問五	目
問六 1	教師
2	(農業)家
問七	エ

問八	人のせい	く
	に	な
	に	つ
	に	た
	始	ら
	め	ま
	た	た
	の	人
	せ	の
	こ	い
	と	に
	は	す
	、	る
	う	と
	ま	い
	く	う
	い	こ
	か	と
	な	。

問九	ゆきは震災の時
	自
	分
	の
	人
	生
	を
	自
	ら
	の
	責
	任
	で
問十	選び
ウ	取

問十一	しど
	、ん
	言
	な
	に
	辛
	い
	状
	況
	で
	も
	人
	を
	笑
	顔
	に

- 三
- 2 減
 - 3 退
 - 4 易
 - 5 旧
 - 許